

フィリップ・エルサン (1948～)

復活祭の歌 (シャン・ド・パーク)

エルサンはローマに生まれたフランス人作曲家。パリ音楽院ではアンドレ・ジョリヴェのクラスに学んでおり、精妙に構築された響きに動的なパッセージを組み合わせていく書式は非常に完成度が高い。歌劇から器楽作品、合唱曲まで手がけるジャンルは幅広く、近年には2014年1月にパリのシャンゼリゼ劇場でエマニュエル・バユが初演したフルート協奏曲「ドリームタイム」などがある。

「復活祭の歌」はレ・ヴァン・フランセの委嘱によって筆がとられ、2016年8月3日にサント・プロヴァンス音楽祭で初演された。パッハが同名のカンタータ (BWV4) で用いた、ルター作による復活祭のコーラル「キリストは死の縄目につながれた」とを主題とする、自由な変奏曲形式で書かれた作品だ。グレゴリオ聖歌に由来する旋律が全編を貫く素材となり、それが様々なテンポやダイナミクスに身を委ねながら姿を移ろわせていき、最後をパッハの和声付けを踏まえた形のコーラルとして、その全容を現前化させるコーダへと流れ込む。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770～1827)

ピアノと管楽のための五重奏曲 変ホ長調 Op.16

- 第1楽章 グラヴェーレアレグロ・マ・ノン・トロッポ
 第2楽章 アンダンテ・カンタービレ
 第3楽章 ロンド / アレグロ・マ・ノン・トロッポ

敬愛する大家ハイドンから才能を認められたのを機に、ベートーヴェンが生地のボンを離れてウィーンへ居を移したのは1792年のことだった。それから数年の間に、彼は様々な編成の管楽合奏作品を手がけている。新進作曲家の身ゆえ、貴族お抱えの楽士が受け持つ娯楽音楽などの需要に応える必要にも迫られたのだろう。その経験もバックボーンとなって生まれた大きな実りと呼ぶべき存在が、本日演奏される作品16。魅力的な楽想と緊密な構成感を手を取り合った、1790年代のベートーヴェンを代表する傑作の1つだ。

1796年の4月、ベートーヴェンは演奏旅行先のプラハでモーツァルトの「ピアノと管楽器のための五重奏曲」変ホ長調 K.452を聴いた。1784年の初演後まもなく父レオポルトへ宛てた手紙に「これまで僕が書いた曲でも最高のもの」とモーツァルトが記した作品は、若き日の楽聖にも訴えるものが大だったに違いない。その先の滞在地のベルリンで彼は同じ編成と調性の「五重奏曲」に着手し(1794年頃から想を練っていた形跡もある)、ウィーンで完成に至らした。初演は1797年4月6日にウィーンの宮廷料理人イグナツ・ヤーンの構える「ヤーン亭」(演奏会場併設の飲食店)で行われ、ピアノはベートーヴェン自身が担当している。

第1楽章の序奏が次第に劇的なコントラストを強めていく過程はまさに若き日の楽聖の面目躍如だ。ソナタ形式の主体でピアノと管楽器が交わすやりとりも、寛いだ風情と大胆な気分の変化を兼ね備える。第2楽章は変奏曲とロンドの融合形で、短調の部分を経てから回復するテーマが、そのつと裝飾性を強めていく。第3楽章はロンド風のソナタ形式。主題を展開風にあしらうダイナミックな中間部がベートーヴェンらしい。

アルベリック・マニャール (1865～1914)

五重奏曲 Op.8

- 第1楽章 暗く
 第2楽章 柔和に
 第3楽章 軽快に
 第4楽章 喜びげに

マニャールの作風の特徴をなす響きを濃厚感や自在な転調は、フランスの楽壇における先人でいえばフランクに通じるものだが(作曲を師事した恩師のダンテイ経由で受け継いだ書式とも指摘できる)、ドイツの後期ロマン派音楽を思わせる陰影の濃い感情表現や峻厳さに傾く場面も多い点は非常に個性的だ。その彼が第一次大戦中、ドイツ軍兵士が家に放った火で焼死してしまったのは歴史の悲劇というほかない。

「ピアノと木管楽器のための五重奏曲」は1894年の作品。ソナタ形式の第1楽章は二短調の調号で書かれながらも、マニャールが好んで用いた教会旋法(この場合は主音Dに対してE♭を含むフリギア調)が主体をなし、それゆえ身にまとうセピア的な色彩感が「暗く」と銘打つ理由でもあろう。展開部におけるフーガ風の進行も彼らしい筆遣いだ。第2楽章の内省的な旋律と和声の織りなす線は、ワーグナーから受けた影響を血内化したフランス音楽として最良の所産と評せよう。スケルツォにあたる第3楽章では、オーボエが異国風の旋律を導入しリリオが異彩を放つ。多様な要素を律動的な流れの中に配した主要主題と、コーラル風の副主題を対比ならびに統合していく第4楽章は、自由なロンド風のソナタ形式。

フランス・ブーランク (1899～1963)

六重奏曲

- 第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ
 第2楽章 ディヴェルティスマン / アンダンティーノ
 第3楽章 フィナーレ / プレスト・ツィシモ

第一次大戦後のパリで気を吐いた作曲家集団「六人組」の一員にして生粋のバリジャン。そして骨の髄までメロディストだったブーランク。その音楽は友人の評論家から「僧侶と悪童の同居」と形容されたが、彼の内面に集食會都合人的な宴饗の念が、ときに諧謔的なまでウィットに富んだ洒落な筆致と同居を遂げたような作風の二面性が前面に出てくるのは、重要な友人を亡くするなどの不幸に見舞われた1930年代初頭以降のことである。1932年に完成し、翌年12月の初演を経てから1939年に改訂を見た「六重奏曲」は、当時のブーランクの内面を象徴的に伝える作品だ。

第1楽章はたたみかけるような導入部に始まり、そこで全曲を統一する動機が提示される。主体はどこか落ち着かないムードで、ときに辛辣な語彙も交えながら移り気な対話が繰り返られていく。パノラの旋律(これも後続楽章で重要な役割を演じる)に始まる中間部はマンコリーの色が濃い。第2楽章は一転してモーツァルト風の清々しさをたたえ、享楽的な中間部は出世作の「北鹿」(1924年初演)を想起させる。第3楽章は「リ」の街角を舞台とする寸劇きながら、それが乱風騒ぎに陥る寸前に登場人物たちがハタと動きを停止。続くコーダは静謐な空気感のもと、主要楽想を回復させながら肯定的な口調の終結へ曲を導く。